

令和3年度後期アーバンデザインスクール第3回実績報告書

1. 開催日時

令和4年1月15日（土）10時30分～12時00分

参加人数: UDCBK での視聴: 1名、オンライン: 10名=計11名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

2. テーマ

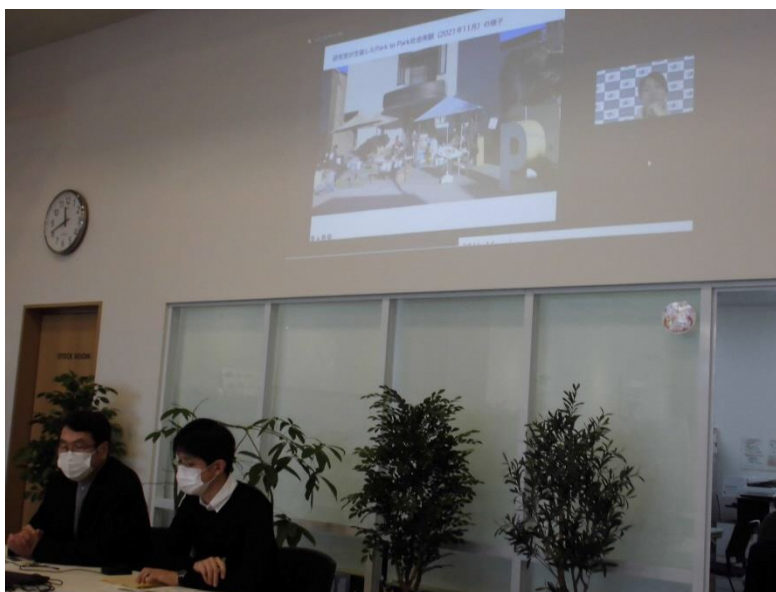
「子どもと子育て世代の目線から見る“まちなか”」

- 子育てから未来に向けたまちづくりを思い描いた時、どのようなことを考えていく必要があるか。各分野の専門家の多角的な視点から、まちづくりと子育てについて全5回シリーズで展望する「子育てからまちづくりを考える」の第3回目である。
- 第3回目の本スクールでは、コンパクトシティやウォークアブルシティという新しいまちづくりの方法と子育てに関して、先進的な富山市の事例を参考にしながら、まちなかの風景はいかにあるべきかということについて、高柳百合子氏に話題提供いただきながら、及川清昭氏（UDCBK センター長、立命館大学理工学部特命教授）のコーディネートのもと展望していく。

3. 話題提供者

- 高柳 百合子 氏

富山大学 都市デザイン学部 都市・交通デザイン学科 准教授



4. 話題の概要

高柳氏による講演

ア. 自己紹介

- 大学で土木工学を学んだ後、国土交通省で都市計画に携わっていた。その後、栃木県小山市において都市計画マスタープランの策定を行った。また、英国において、まちづくりの組織 (Ground Work) の研修を受けた後、つくばの研究所において、小学校区単位での安全・安心に関する研究を行った。国や地方自治体、市民団体、研究所など多様な経験をしてきた。
- 子育てという観点では、都心のマンションから地方・郊外での子育てまで、色々な場所で 10 年余り経験してきている。
- 今回は、仕事で携わってきたまちづくりと子育ての経験からお話をしたいと思う。

イ. 日本の国づくり・都市・コミュニティ

- 日本は海外と比べると自然災害の多い国なので、国づくり・都市づくりの前提として、河川からの氾濫、台風、地震津波といったものから、いかにしてまちを守るかという視点は欠かせない。
- 草津市もそうだと思うが、日本の都市は河川の下流域に広がっているため、河川と付き合い合っていかななくてはいけない。富山市も黒部川を筆頭に、常願寺川、神通川があり、都市をつくる上で、土木工事、インフラの整備が避けられない。
- 一方で、自然界がデザインした創造物が持つ多様性・豊かさに注目することも大切である。生物多様性という観点から、人が生活する場所 (国、都市、コミュニティなど) を眺めた時、生物にとって子どもを産み育てにくい生態系 (環境や社会) は致命的であると言える。
- 日本の人口は、今後 100 年間で 100 年前 (明治時代後半) の水準まで減少していくという推計もある。
- そのような中において、これまでのように国土づくりから地域別の都市づくりといった「タテ」の関係とともに、もう少し解像度を上げて、官と民が協働してネットワークをつくる「ヨコ」の関係をつくっていくことが重要となる。そうすると、小さな地区、コミュニティ単位での実践ということから、まちづくりの多様性も広がっていく。

ウ. 富山のコンパクトシティ・ウォークブル

- 富山市では、急にコンパクトシティと言い出したわけではなく、その背景には、都市計画法ができた 100 年ほど前の早い段階から都市計画に取り組んできた経緯がある。全国的に見ると、都市計画は 90 年代後半からコンパクトシティ政策への大きな転換を図ってきた。富山市のコンパクトシティやウォークブルといったことも、時代の流

れの中から順を追って出てきたものである。

- 富山市はそれまで都市計画に真面目に取り組んだ結果、自動車が利用しやすいように都市がつくられ、人口集中地区の密度の低さや世帯当たりの乗用車保有台数の高さなどに表われるように富山市はクルマ中心の社会になった。70年代以降、まさに自動車が広がっていった中で、今からすぐに自動車の利用をやめてもらうということは難しい。既に公共交通が衰退して、自動車を持たないと生活できないという段階になっており、個人だけではどうしようもない。
- 富山市ではこのような状況を転換すべく、自動車の利用を前提として郊外にまで広がってしまった機能をまちなかに集約していくための土地利用誘導と公共交通の充実に向けた支援に取り組んだ。
- 平成16年から本格的に目指されてきた「公共交通重視と土地利用誘導」によるコンパクトなまちづくりは、平成20年の「富山市都市マスタープラン」において、「串とお団子」と呼ばれるものに結実していった。これは、一定水準以上のサービスレベルのある公共交通である「串」と串で結ばれた徒歩圏のエリアである「お団子」によって広域をネットワーク化していくことを目指したものである。
- 公共交通では、LRTに投資し路線相互のつながりを強めるとともに、重点的なバス路線を整備し便数を増加させた。このような公共交通の充実に加え、土地利用誘導として、交通沿線に居住エリアを集約させていくような政策（住宅購入などに関する助成）も推進している。
- また、再開発事業によって、公共施設をまちなかに再配置したり、居住地区を新たに整備したりするなど、都市機能の集約を図っている。さらに、商業用途となっている地区でも高さ制限によって居住環境を調整し整備を進めている。
- 公共交通利用者は自家用車利用者に比べて、まちなかの回遊や滞在時間が増えることが調査から判明しており、コンパクトシティの推進が市民の交流しやすい場所を生み出すことにつながっていると考えられる。
- 目的地の駐車場から別の駐車場まで自動車で移動するだけでは回遊につながっていない。例えば、新たな電停と商店街の双方に面した場所に整備された「賑わい広場」のように、いかにして回遊して楽しい歩行者空間のネットワークを拡張していくかということが大切になる。
- 公共交通と土地利用をクルマ中心の社会を止めるブレーキとすると、まちなかにウォークアブルな魅力ある居住空間を生み出すことはまちづくりのためのエンジンとなる。
- そのことにより、自動車利用者の増加によって、公共交通利用者が減少し収益の悪化によってサービス水準が低下し、さらに自動車利用者が増加するという負のスパイラルを転換し、公共交通利用者の増加や集約型都市につなげることが可能になる。

エ. クルマ社会なまちなかの子どもと子育て

- 富山市は、現在でも依然として、クルマ社会であり、通勤・通学の半数、買い物では8割以上が自動車を交通手段としている。
- 現在、まちなかでは、子どもも歩行者もいない空間が顕在化している。しかし、人がいないからといって、ウォークアブルな空間が不要ということではなく、潜在的なニーズはあるはずだと考える。
- 富山大学の都市デザイン学部では、デザイン思考によって物事を考えるプロセスを学生に身に付けてもらうことを実践している。このデザイン思考では、今起きていることだけではなく、潜在的なニーズや課題を探ることが重要になる。
- 都心地区の方々にお話を伺うと、まちなかに住んでいる方は利便性に満足されている。一方で、地価の高さ家の狭さ、駅より駐車場を使う生活から、郊外に転居したという人もいた。特に若い世代には、郊外の戸建て新築ニーズは高いと認識されている。
- 富山市のまちなかには子どもが遊べる公園や集える場があまりない。2012年に草津未来研究所が子育てサークルに対して調査した結果でも同じような課題が指摘されていた。しかし富山市では、まちなかの子どもが減ってしまったため、このような子育て世代のニーズが顕在化されにくい状況になっている。
- このような現状を見ると、コンパクトシティ政策で知られている富山市に必要なものは、「大きな都市計画」はこれからもぶれずに推進しつつも、まちなかの「小さな地区」で子ども・子育て世代の声に耳を傾けることであると思われる。
- 例えば、現在、富山市のまちなかには、コンパクトシティ政策を進めているにもかかわらず、時間貸し駐車場が増えている。しかし、このような風景が増えると、歩いても楽しくないまちが出来上がってしまう。
- 公園が少なく、駐車場が多い場所をモデル地区として、駐車場として使われていない時間帯を地域の子どもたちなどが安全に楽しめる公園的な場所にしようという社会実験 (Park to Park) を行政や市民、大学、デザイナーなどの専門家が連携して行った。
- 元病院だった建物も残っているある場所はオーナーがまちの「私設公民館」にできないかという思いを持たれていた。近くには富山大学のシェアハウスができる予定であり、1階には地域に開かれたカフェもつくられる。このシェアハウスと私設公民館の連携によって多世代交流の仕掛けができないかと考えている。
- これまでの大きな計画（都市レベル）では、計画が長期に渡り実際に何が行われているのかが見えにくく、市民にとっては、計画が実施されたときに初めて目に見えるものになる。一方で、小さな計画（街区レベル）では、目に見える単位で計画と実施が常時同時進行となるので分かりやすい。
- 今後、都市中心部においては、小さな単位での近隣コミュニティのための空間をどのように確保するのかということが益々、重要になってくる。また、そのような空間にこそ、子ども・子育て世代の潜在的なニーズがあると考えられる。

5. 質疑応答等

(1) 参加者 1: 郊外で住宅購入を考える子育て世帯が抱える問題が何で、まちなかに住むことでどう解決されるのか、具体的なイメージがあれば詳しく教えてほしい。

高柳氏: 富山市のまちなかへの居住の推進というものは、都市の経営の観点（インフラの維持管理など）からも進めているという側面もある。税収が増えているときはそれでよかったが、人口が減って収入もそれほど見込めなくなる将来にどうするのかという問題が発生してくる。

参加者 1: おっしゃること、行政の視点はよく分かるのだが、住宅を購入する市民が、そのような経営のことはあまり考えないと思う。市民の側からすると、まちなかに住宅を購入するメリットが具体的に感じられないと、郊外の広く安い住宅を買わずにまちなかに住むという選択をしづらいのではないかと思う。高齢化した時のリスクのために、今我慢してまちなかに住むというのは少しデザイン思考的ではないように感じる。

高柳氏: まちなかに住むというスタイルもあるという提案の仕方があると思う。郊外では、ある意味でカフェやレストラン、介護といった機能を家の中につくってしまえる。一方で、まちなかの狭い居住空間ではそれはできないが、まちをリビングに見立てて、まち全体にそのような機能を持たせるということも可能になる。そちらの選択肢が楽しいと思う人は、そちらを選択するということで、郊外に住みたいという思いを否定はしない。ただ、富山市は例えば郊外のコミュニティバスの路線には見直しをしているところもある。そういった状況の中で、これからも郊外に住み続けられるのか、あるいはこれからは高齢になった時にはまちなかに住み替えるといった選択も起こってくると思う。また、郊外の単位で公共交通を自主的な財源で運営するという方法もあり得る。

(2) 及川氏: 保育施設など子育てに関する環境といった面で、富山市にはどのような政策があるか。

高柳氏: 富山市のまちなかでは、小学校は統合されて数が減っているが、保育施設は公共だけでなく民間の施設があるので数は結構ある。富山市が民間に補助をして保育施設の数や定員を増やしている。

(3) 参加者 2: 私設公民館や空いている駐車場の利用などは、とても魅力的な例だと思うが、実際、立ち上げや、実行する段階での、土地利用の必要資金はどうされたのか。

高柳氏: 元病院の1階の私設公民館へのリノベーションということについては資金調

達が難しい面がある。テナントに入っている方が一般社団法人のような運営する団体で資金調達できないかということも 2019 年から模索しておられる。大学としても連携できることがあれば関わっていきたいと思っている。

- (4) 及川氏: 本日は、マクロな視点からミクロなスケールまで、コンパクトシティとして著名な富山市の事例から公共交通や歩行者空間の在り方を学ぶことができた。コンパクトシティやウォークアブルシティを目指す南草津にとって大変参考になり、特に、タテ型の都市づくりとヨコ型の近隣コミュニティの形成という両方の観点において、UDCBK のような存在は大切な役割を担うことになっていくと思う。

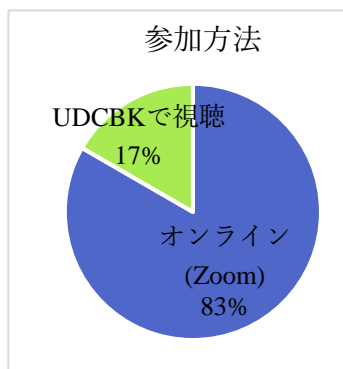
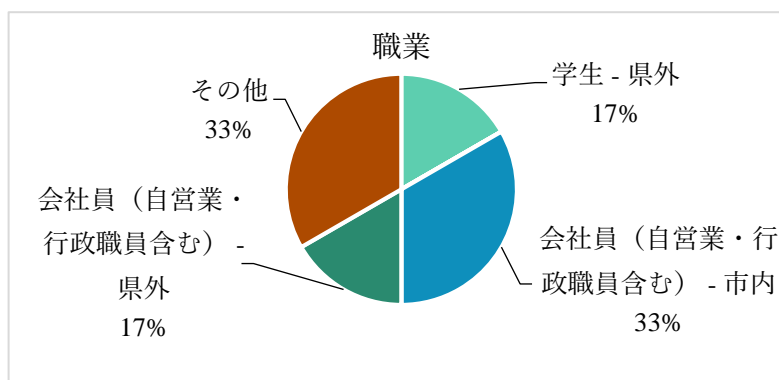
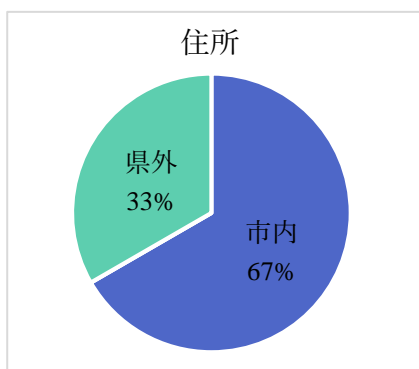
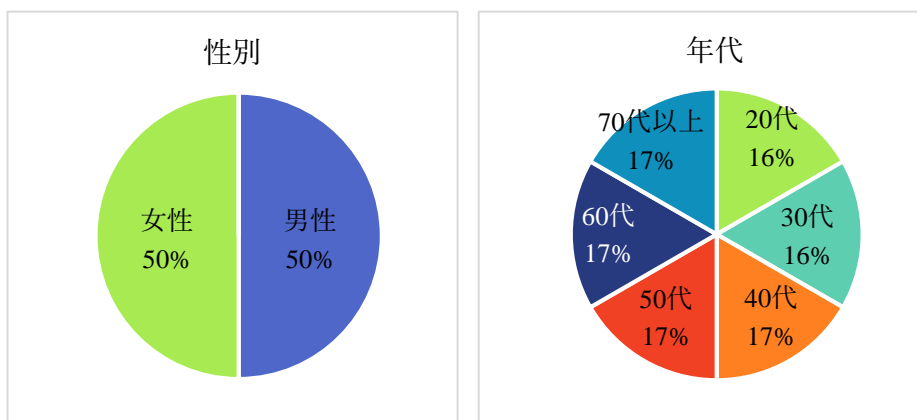
6. まとめ

- 富山市がこれまで推進してきた公共交通の充実と土地利用の誘導をエンジンとしたコンパクトシティ政策は、クルマ社会へのブレーキ = ウォークアブルなまちへの転換に大きな役割を果たし、先行事例として学ぶべき要点が数多くある。
- 一方で、現在、先行した富山市から見えてきているのは、魅力ある居住空間をいかに増やしていけるかという、ウォークアブルなまちを加速させるエンジンの必要性である。
- 大きな計画だけでは見落とされがちな潜在的なニーズを、産学公民の連携から小さな単位で実践していけるよう、UDCBK でも様々な可能性を模索していきたい。

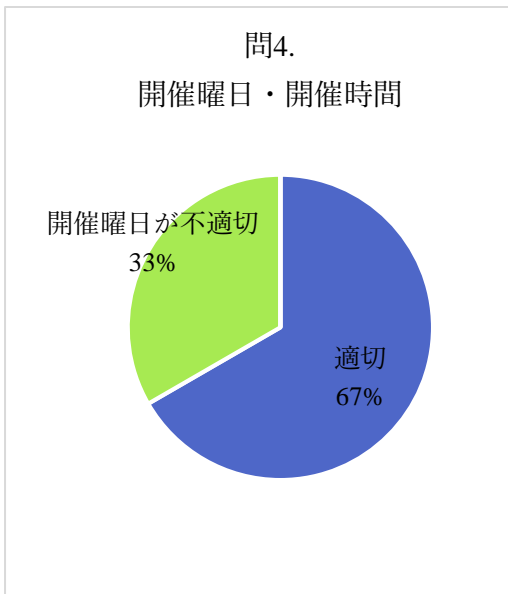
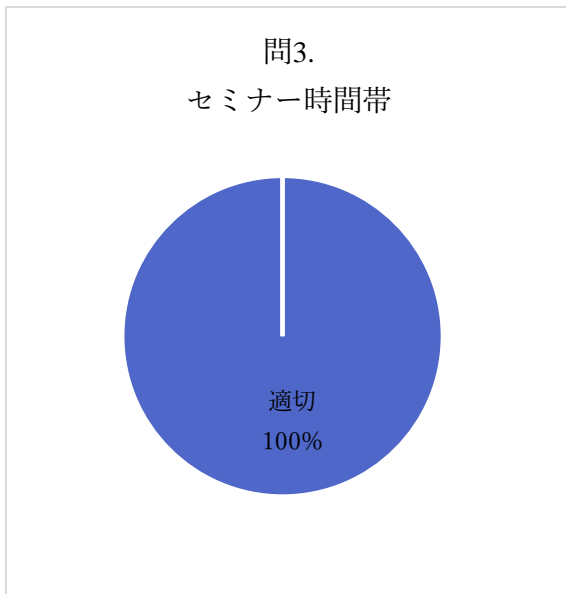
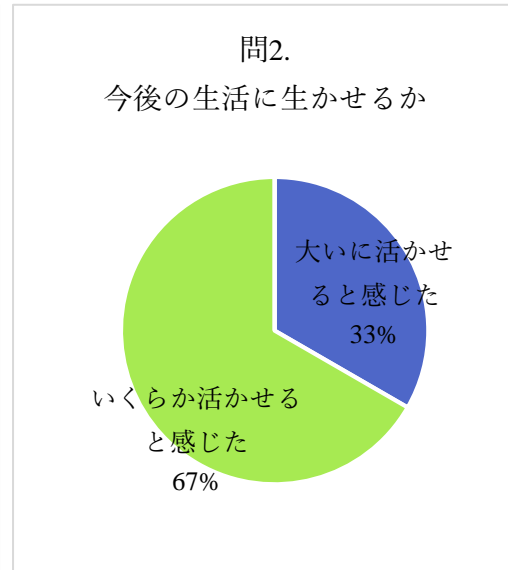
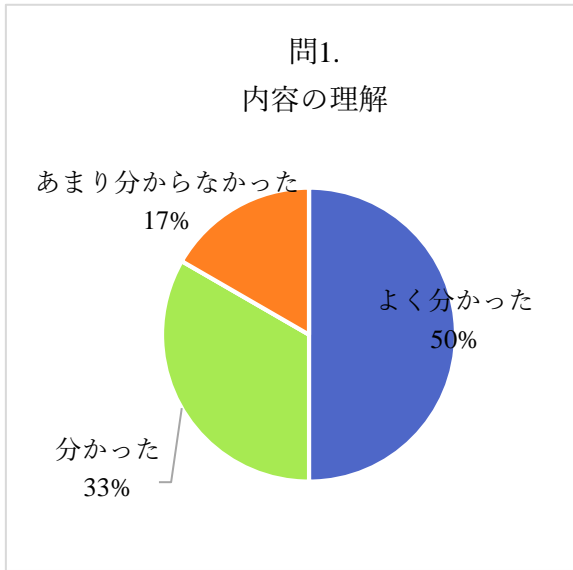
7. アンケートまとめ

(1) 参加者属性

参加者 11 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 6 名、回答率は 55% だった。



(2) 内容について



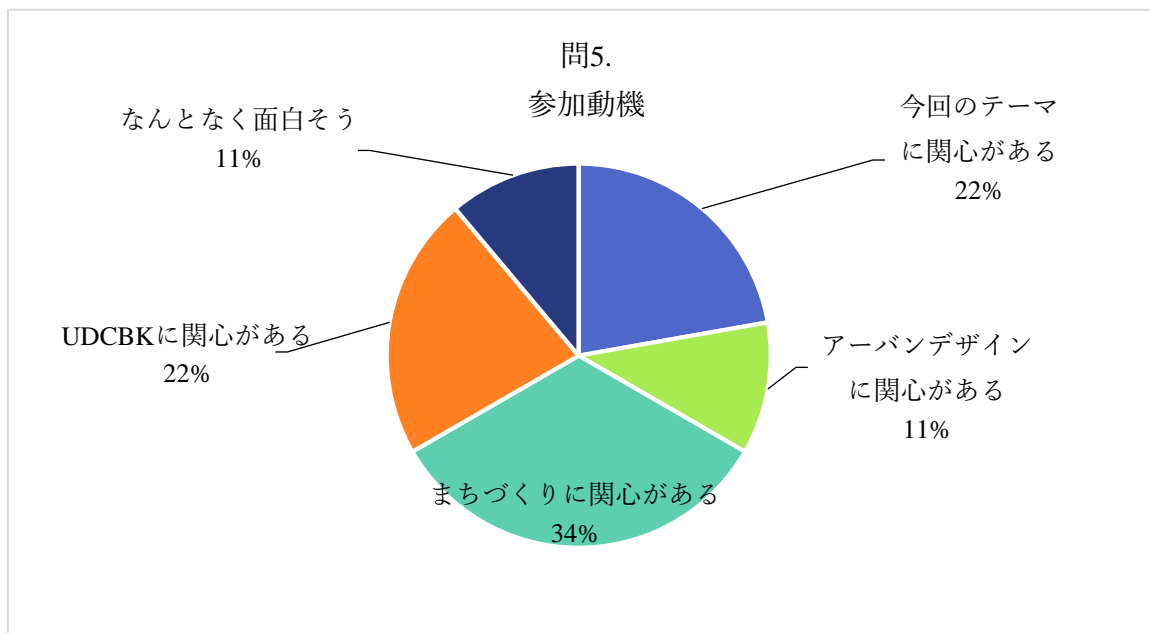
【自由記入欄回答】

問3. 時間はどうでしたか。

回答なし

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

- 個人的には平日が良い。(40代女性)
- 土日祝日は避けて欲しい。(30代男性)



【自由記入欄回答】

問6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- 大学のあるまちにおける生涯学習
 - ・ 大学生の学びの成果を UDCBK で聴くことが出来る機会がもっと頻繁になっても良い。あるいはその時の様子を Youtube 等でいつでも視聴可能になるとよりありがたい
 - ・ 大学生のまちでの学び「サービス・ラーニング」の様子を知りたい
 - ・ キラリエ草津のボランティア登録「キラリエサポーター」と地域での学びを進める学生やボランティア活動をされている学生の方々と交流の機会を持たれると良いのではと思っている。(50代女性)

【自由記入欄回答】

問7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 国、富山市の取組み、そして今抱えている課題は非常に参考になりました。私自身、ハウスメーカーの新規事業企画の部署なので、まちづくりのデザイン思考の重要にはとても共感していますので、高柳先生のご活躍を楽しみにしています。(30代男性)
- 印象に残ったのは、「私設のまちの公民館」と「空き駐車場の利用」でした。南草津でも活用できる、魅力的な事例だと感じたのが、印象に残った理由です。ただ、いいアイデアだという感想だけでなく、実現するには何が必要かと考えた時、一番のネッ

クは、土地の借用料といった、経費を誰がどういう形で負担し、それは継続可能か、という事ではないかと思います。実際、どういう形で、調達されたのか、が知りたかったと思いました。(60代女性)

- 全体的に話が難しかったです。専門的なことが多く、個人的にはあまり興味が湧きませんでした。もう少し、草津市との比較や触れる部分を多くしてもらえると、専門的な内容でも興味深く聞けるように思います。(40代女性)
- まちなかへの居住誘導に向けて、郊外ではなくまちなかで暮らすことのメリットをうまく創出し、適切に情報発信することの難しさを実感しました。(20代男性)
- 仕事と子育てを両立させながら、まして「まちづくり」を仕事にされている方の貴重なお話を聞かせて頂きありがとうございました。

印象に残ったこと

1. 多様な方が住み、受け入れられているまちの方が子育てしやすいということ
2. 日本人は絶滅危惧種
3. まちをリビングに

郊外が子育てしやすいと移り住む人が高齢化して車の免許を返納し、公共交通のアクセスが悪く住みづらくなる。郊外の住宅をリノベーションして若い世帯が住み、高齢者は交通の便の良い街なかに移り住む、一部残った高齢者と若い世帯がうまく世代間交流がなされ支えあえる地域が理想。交流できる場づくりを意図的に進める必要がある。(50代女性)